

若手研究者コラムリレー

高橋 徹（たかはし とおる）



プロフィール

仙台大学体育学部講師

日本体育学会の専門領域: 体育哲学／体育科教育学

体育哲学専門領域の運営委員を務めています

宮城県生まれ

2008年 明治大学商学部商学科 卒業

2013年 国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科 修了
博士(体育科学)

国士舘大学体育学部附属体育研究所特別研究員、

環太平洋大学体育学部講師を経て、2016年より現職

E-mail: tr-takahashi@sendai-u.ac.jp



米国からの短期留学生と筆者(右から3番目)

わたしの研究

体育とは何だろうか？ なぜ体育が必要なのだろうか？

体育哲学分野が抱える研究課題の一つには、「体育とは何か？」という問いが存在すると言われています。なぜこの問いを立てる必要があるのかというと、この問いに対する答えを明らかにすることによって、体育についての思惟や認識の確実な出発点が明確になるからです。体育をどのように考え、どのように進めるのかという問題を根本的に究明することが体育哲学分野の任務であるとし、この問いに向き合うことを重要な課題として担ってきたのです。

さて、前置きが長くなってしまいましたが、「体育とは何か？」という問いに答えることは、私自身も明らかにしたいと思っている研究課題でもあります。ですが、私の関心はどちらかと言えば「(学校の)体育とは何か？」という問いになります。

私たちにとって、学校に通うことやその学校の中で体育の授業を受けることは当たり前のことに認識しています。しかし少し立ち止まって考えてみると、学校に通うこと、そして学校に体育の授業があることというのは、必然ではなくある種特殊な状況です。

なぜ学校に通うのでしょうか？そしてなぜその学校の中で体育の授業を受けなければならないのでしょうか？多くの子どもが抱くこの問いに対し、制度や規則によって決まっているからであるという答えを返すことは簡単です。しかし、それはこの問いに対する真摯な答えでないことは明らかです。

人間にとつての教育の必要性、社会における学校の必要性、そして学校における体育の役割について、皆が納得できる共通理解を見出したいと思い研究に取り組んでいます。

わたしの渾身の論文・書籍・記事

必読

高橋徹編著(2018)はじめて学ぶ体育・スポーツ哲学。みらい。

高橋徹ほか(2018, 2019)学校体育で育てる身体を考える。体育・スポーツ哲学研究。40(1): 83-95, 41(1): 65-79。

高橋徹(2017)体育の存在意義論の批判的検討: 課題の整理と今後の議論に向けた考察。仙台大学紀要。49(1): 37-44。

(なんでも帳)

「なぜ体育哲学分野の研究をしているの？」と聞かれることがあります。実は私自身は、研究に関する確たる問題意識をもって大学院に進学したわけではありません。一般企業(金融系)への就職活動をしていた大学3年の頃、このまま何となくビジネスマンになっていこう自分の将来に対し違和感を覚え、体育教師になることを目指して大学院への進学を決めました。しかし、体育教師を目指していたはずが半年後にはあっさりとその目標を変え、博士課程への進学を希望していたと記憶しています。

私の研究も同様に、その時々
の興味や関心によってコロコロと変わ
てきます。学会や研究会の場では
その都度、様々なテーマで発表して
いますが、それを許容してくれる雰
囲気と、議論を深めてくれる研究仲
間がいることが体育哲学分野の魅
力ですし、この分野で研究を進める
楽しさであると感じています。



原稿をスキー実習中に執筆しました
蔵王のゲレンデからの写真です

○次回のコラムリレーは日本スポーツ協会(JSPO)の
「石塚創也」さん予定しています。

日本体育学会若手の会からのお知らせ

2018年8月に日本体育学会若手の会が発足しました！

→メーリングリスト登録フォーム:

<https://goo.gl/forms/zGMPdPa5fY3kcB5a2>

学会大会、研究会等の開催や報告者募集に関する案内、公募や助成金
情報等に関する情報提供を配信予定です。皆様からも、メーリングリストで周
知したい情報がありましたら、下記までご連絡ください。

taiikugakkaiwakate@gmail.com (担当: 木村)

